デュルケームにおける革新期認識の一断面
——ルネサンス論を中心として——

An Aspect of Durkheim's Understanding of the Period of Renovation
—— His Views on "Renaissance" ——

横 井 敏 秀
YOKOI Toshihide

1．はじめに

本稿では、デュルケームの『フランスにおける教育の発展』(1904-05年からパリ大学で行われた講義の遺稿。1938年刊。以下、『教育の発展』と略）における、16世紀ルネサンスに関する記述を検討する。

近年、後期のデュルケームに、集合的沸騰をキー概念とした創造的革新の過程を重視する社会変動観——コミュニオンの熱狂を通じて生み出された新たな価値、それを核とした社会の道徳的共同性の回復、また諸個人の生の活性化と道徳的向上といったタームが、その主たる内実をなす——が存在したことが強調されるようになってきた。かかる研究においては、必ずといっていいほど、デュルケームがたとえば以下の出来事を創造期(les périodes créatrices）・革新期（les périodes novatrices）を代表する歴史的事象として例示したことが、指摘される。すなわち、「キリスト教の大きな危機、12および13世紀にヨーロッパの学究的な人々をパリに陸続と送ってスコラ学の発生となった集合的熱狂運動、宗教改革、ルネサンス、革命時代、19世紀の偉大な社会主義運動」(1974b〔1911〕：p.115＝1943：207頁）等である。けれども常々疑問に感じられるのは、それらはこれまで単に一括して列挙されるのみで、個々の歴史的画期をデュルケームがいかに分析しているかについてはほとんど顧みられることがなかった点である。

実はデュルケームには、上に挙げられた出来事のほとんどを視野に収めて考察した著作がある。教育を主たる対象としつつも、1600年間にわたる「フランスにおける人間精神の進展」そのものについての「広大かつ大胆なフレスコ壁画」を描いたと評価される(p. 4 ＝12頁。アルヴァックスの序文)この著作が、冒頭に掲げた『教育の発展』である。この書に関し注目すべきは、革新と沸騰が、現実の個別具体的な歴史的文脈の中で説明されているという点であるが、それだけではない。さらに興味深いのは、デュルケーム自身が他の多くの箇所で論じた、そして彼の後期の社会変動観としてある程度図式化されて流通している、革新・沸騰のあり方には必ずしも適合しない言説が見いだされることである。すなわち、革新期は社会に道徳的再生と統合の回復をもたらすとする見地とは齟齬をきたすような、事象や思想の動きが記述され、批判的に論評されているのである。しかも、事情をより複雑にしているのは、そうした否定的態度には、どこかしら抑制されたもの、ある種のアンビヴァレンスが看取されることである。

デュルケームの個別的な歴史事象についての言説に眼を向けることは、彼の革新的時代の捉え方、ひいては社会変動観そのものの、ときには矛盾をはらんだ複相性を正しく把握するために、欠くことのできない作業であるということができる。わけてもルネサンス論に焦点を絞ったのは、革新期へのいわば両価的な態度をことのほか明瞭に示しているという理由による。彼のこの態度の重層性の内実を明らかにすることが、本稿での目的となる。

2．革新期としての16世紀ルネサンス

「ルネサンス（Renaissance）」という語については、『教育の発展』に先立つ『自殺論』において、次のように説明されている。先行する社会の遺産が、何世紀かの間、忘却の淵に沈んでいて、それを創り上げた国民が滅んでしまって久しいのち、再び日の目をみ、新しい社会のもとで新しい存在を開示し始めることはよくあることである。「この極めて特殊な現象を特徴づけているものが、ルネサンスと呼ばれる。ルネサンスとは、いわば、諸事実の中に沈澱し、そこに長い間潜在していた社会生命が、突然目覚めて、その形成に与らなかった民族の知的・精神的志向を変化させることをいう」（1976〔1897〕：pp.354－355＝1985〔1968〕：395頁）。また、『教育の発展』では、「一般にルネサンスという名称は16世紀に遂行された知的・道徳的再興の一大運動だけに与えられるのが慣例である。だが現実には、思想や教育の歴史はこの復興（renaissance）のためのたゆみない連続にほかならない」（pp.43－44＝79頁）と説かれている。『自殺論』の定義が、「滅んでしまった国民」の創造した文化の新しいかたちでの復興をもっぱら念頭においてなされているのに対し、『教育の発展』での説明は、主としてフランスという同一の社会・民族内の、連続性を保持しつつ展開する文化的再生という意味がこれに付加されているように思われる。8世紀末のカロリング朝の文化的復興、11世紀に始まる「精神的沸騰（effervescence mentale）」をデュルケームがそれぞれ第1、第2の「ルネサンス」の語で呼んでいる（p.78＝143頁）のは、そうした両者の意味合いにおいてである。そのように考えると、本稿で検討する16世紀ルネサンス（いわば、第3のルネサンス）も、彼のいうところの「滅んでしまった国民」の文化（とりわけここでは古典古代文化）の新たな蘇生であると同時に、フランスの知的・教育的文化の再活性化として把握すべき運動といえよう。あるいは、後者がその重要な構成要素として前者を要求したとみなしうる。ルネサンスは単なる古代精神への回帰ではないとするデュルケームの主張（p.194＝337頁）も、この文脈で理解できる。彼によれば、それはむしろ、16世紀に生じた社会生活の根底的条件の変化に伴う知的・道徳的志向の新展開を意味するものであり、中世においてもすでに知られていた古代の文芸に改めて比類ない価値が認められたのは、この展開によって、より優雅で洗練された審美的教養が要求されたからにほかならない（p.196＝340頁）。

さて、デュルケームによれば、16世紀ルネサンスが何であったかを理解するには、上の知的・道徳的志向の新展開を生じさせた社会的原因と過程を説明する必要がある。「民族がその精神的態度を、このようにまで変えるのは、社会生活の内奥にある条件自体が変化したときにおいてだけである」（ibid.）からである。彼の見るところ、教育や文化の革新を駆動するモメントは、「旧いシステムによっては満足されることのなかった新しい要求」（p.194＝337頁）の出現にある。この「新しい要求」――「社会意識の深層」（p.209＝360頁）において、一般の社会の成員には十分に意識されぬまま展開する――こそが、知的・道徳的志向の変化を決定づける当のものであるが、この要求自体は、より根源的な社会的条件の変容によって発生すると考えられている。

16世紀ルネサンスの勃興に大きくあずかった社会的条件の変容の具体的内実と、それが生み出した要求に関して、デュルケームは幾つかの事柄を指摘している。

その第1は、9世紀のカロリング帝国の崩壊以来長らく続いた、中世の「混沌とした、変動の多い、不安定な状態」（p.252＝439頁）がようやく終わりを告げ、「徐々に秩序が確立され、従来より力の整った警察や、よりよく組織された行政が人々の信頼を回復してきた」（p.197＝341頁）ことである。「社会の諸機能も正しく調整され」、「より安定した、より調和的な組織」（p.252＝439頁）も築かれるに至った。人々は平和と社会的安定を楽しむことができるようになった。

第2は、秩序の回復に並行して、経済活動が大いなる活況を呈したことである。都市は繁栄し、巨大な富が蓄積された。その結果、経済的逼塞に由来する「中世の凡庸な生活」に代わり、物的生活の豊かさを背景とした「安楽、優雅な、かつぜいたくな生活への趣向」（p.197＝341頁）が目覚めてきた。また、「あらゆる階級間のいわば接近が生じ」（p.198＝343頁）、新興階級は貴族の生活を模倣し、気品ある、洗練された教養に対する

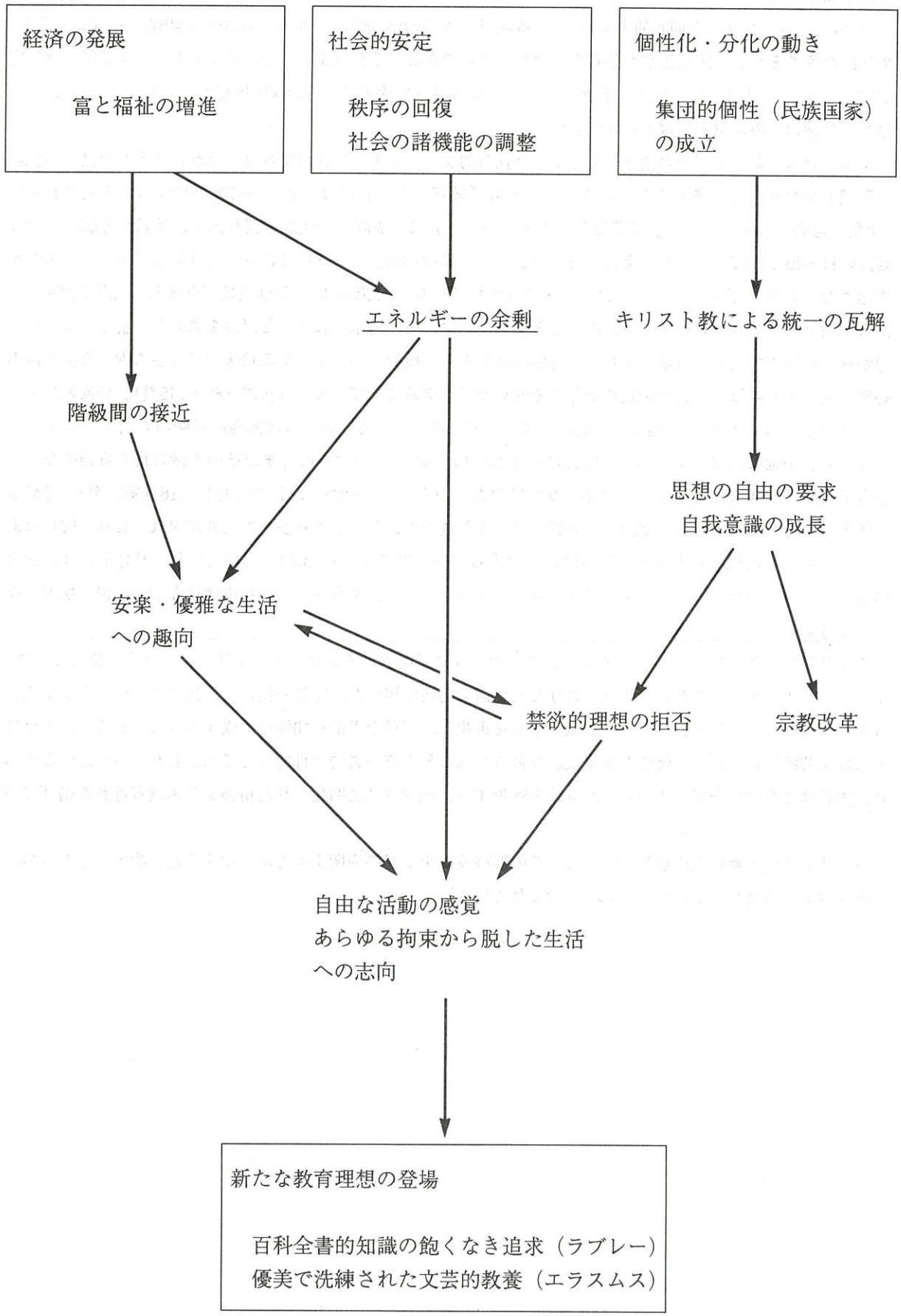
要求が高まった。

第3は、「ヨーロッパの同質的大衆の中に当時生じていた個性化および分化」(p.199＝345頁) の帰結として、集団的な個性をもった民族国家が独立を自覚したことである。それにより、旧いキリスト教による統一は決定的に破られ、その権威は減退した。安楽でぜいたくな生活への欲求による禁欲的理想からの離反とあいまって、思想と生活の自由が熱烈に求められてきた。

ルネサンスの革新と理想の創造を可能にした社会的なエネルギーに注目すれば、それはこうした諸々の状況に関連して発生すると考えられている。そもそも『教育の発展』には、生活の必要性によって拘束されない「余剰 (過剰) のエネルギー」の蓄積とその発散が、社会に「沸騰」の状態を創り出し、革新へと導くという観点が打ち出されている。たとえば、11～12世紀の「精神的沸騰」(p.81＝147頁) と「第2のルネサンス」を生起させたエネルギーについて、次のように説かれている。「文明に関する創造的時代とは、諸国民の中に、何ら生活上の必然性の要求するところとならず、ただはけ口と消尽されることだけを求める、蓄積された生命力が存する時代である。芸術も学問も、各種の研究も、一般的にいって、ある意味では社会の内に直接生活の必要を充たすもの以上の力の余剰を予想するぜいたくな営みなのである」(pp.79－80＝145頁)。16世紀ルネサンスに関しては、「沸騰」の語は明示的には用いられてはいないものの、ほぼ同様の説明の方式が見られる[1]。すなわち、中世にはヨーロッパの諸国民はいまだその「少年期」にあり、「まだその生活の最も直接的な、しかも最も緊急な要求を充足するのに必要なだけの力しかもっていなかった」のに対し、16世紀に至り、「最も溌剌とした青春期に入った」諸国民の血管には「より豊かな、しかもより多くの血液が流れており、彼らはあり余る生命力を消尽せんものと、そのはけ口を求めていたのである」(p.201＝348頁) と。具体的には、社会の安定化と経済の繁栄によって調達された巨大なエネルギーが、ルネサンスの自由闊達な知的昂揚の推力となったと考えられている。

ルネサンスの革新をもたらした要因は、以上のように説明される。16世紀ルネサンスの2人の偉大な人物、ラブレーとエラスムスの教育理想は、こうした要因に応えて現れた、時代の精神と思想の流れの如実な反映にほかならない。ラブレーは何よりも知識・学問を重視し、百科全書的な知性を形成すべきことを説き、エラスムスは文芸的教養に根差す優雅な表現技法を体得することを第一義的な目的として唱道したという違いこそあれ、両者はともに平安で自由な時代的気分を呼吸する、洗練され文明化された精神を尊ぶ教育理想を掲げていた。

ルネサンスの革新の生成過程について、その要因連関を上記の説明をもとに図示すると、次のようなものになろう (上で言及しなかった事項も若干含まれている)。


経済の発展
富と福祉の増進
社会的安定
秩序の回復
社会の諸機能の調整
個性化・分化の動き
集団的個性（民族国家）の成立
エネルギーの余剰
キリスト教による統一の瓦解
階級間の接近
思想の自由の要求
自我意識の成長
安楽・優雅な生活への趣向
禁欲的理想の拒否
宗教改革
自由な活動の感覚
あらゆる拘束から脱した生活への志向
新たな教育理想の登場
百科全書的知識の飽くなき追求（ラブレー）
優美で洗練された文芸的教養（エラスムス）

3.「危機の時代」としてのルネサンス

デュルケームのルネサンス論の最大の特質は、「危機」の時代としてこれを捉える見方である。ルネサンスをめぐる行論には、幾つかのそれぞれ意味合いを異にする「危機」の叙述がある。まず挙げられるのは、「岐路に立つ、過渡的な時代 (époques décisives et de transition)」(p.223=384頁) という包括的・一般的な特徴づけである。これは革新期が基本的に変動の時代である以上、いずれの革新期にも多かれ少なかれみとめられるものであるが、その中身をより子細に考察すると、ルネサンス特有の危機の様相もまた、浮き彫りになってくる。

まず、「わが国の教育システムがさしかかっていた激しい危機」(p.208=358頁) が、新たな思想を喚起し、ラブレー・エラスムスをはじめとする多士済々の思想家たちを輩出したとする見方である。既述のように、ルネサンスの沸騰状況を生み出したものは、秩序の回復と社会の相対的な安定化の進行に伴う (あるいは、それを先行条件とする) 新たな要求の登場だとされている。社会の制度的な枠組の側面からこれをみるならば、それは中世的な旧い制度がかかる要求を充足することがもはや不可能となり、衰微を余儀なくされるとともに、これに代わって要求に適った新理想が出現してくる状況を意味するものである。そうした事情につき、デュルケームは、ルネサンスの溌剌たる活力に関説しつつ、次のように述べている。「諸国民の増し加わった活動力は、自由自在にそれを発揮できるより広い地平とより大きい希望とを必要としていた。この溢れんばかりの生命力を抑えることができなくなった諸々の旧い枠組は、それゆえ、自らを維持することもできなくなった。教育の理想自身も必然的に変わらざるをえなくなったのは以上の理由によるのである」(p.201=348頁) と。ここでは、「危機」は、旧い体制・枠組の終焉を告げる弔鐘であるとともに、力ある理想を生み出す培養基としての役割をも果たしているとみることができる。そうした点で、この場合の「危機」——同種のものは他の革新期にも共通に見いだされるが——には、ある種ポジティヴな意味合いが含まれているといってよい。

次に、ルネサンスがなお存続する社会の旧い枠組に挑戦する革新のうねりを意味するものである以上、新理想と旧制度の対決は、何ほどかの「危機」を醸しださずにはいないであろう。これもまた革新期の常である。だが、デュルケームのみるところ、本来過去の伝統は有機的な連関を保ちつつ現在と結びついており、その構成要素として生き続けている。いかなる新理想といえども、一面において過去の理想の継承者にほかならない (e.g., p.21=41頁)。新理想の過去のそれへの挑戦が、社会の新生を志向してのコンフリクトという積極的な意義をもちうるのは、かかる限界をわきまえていればこそである。しかるに、ひとたびそうした埒を越えて、旧い伝統を根こそぎ破壊しようとする傾向が力を増すと、「危機」のもつ意味合いはよりネガティヴな方向へと転換を遂げることになる。これは実際、ルネサンス期に起こったことであった。ルネサンスの著作家たちは、スコラ哲学を愚鈍の遺物と決めつけ、一切の妥協を許さない、革命的な態度をもってこれを排除すべきだと主張した (ibid.)。

デュルケームはこうしたルネサンスの傾向を、明示的に「危機」(ネガティヴな) の文脈で論じているわけではない。しかし先述のように、デュルケームにとり、ルネサンスはヨーロッパ社会がまさしく青春期に達した時代であったこと、またある箇所で、「節度」や「中庸」に頓着せず、「あらゆる制約や限界を無視する」のが青春期の特質であるとも述べている (pp.218−219=375頁) ことから類推すると、ルネサンスの著作家たちの過去のすべてを葬り去ろうとする極端に先鋭な態度は、ルネサンスの危機=デュルケームのいう「成長期の危機 (une crise de croissance)」(p.201=348頁) の1つの局面を表すと考えて大過あるまい。

しかし、ルネサンス論における「危機」の捉え方は、こうした意味合いにのみとどまるものではない。むしろ最も問題とすべきは、先行する沸騰的状況および理想の創成が、社会の道徳的活性化と統合をもたらすどころか、かえって「教育的・道徳的な危機 (crise pédagogique et morale)」(p.260=452頁) の醸成を帰結したとする見方が示されていることである。そして、これこそはルネサンスの「危機」にとりわけ特徴的な状況に

ほかならない。

既述のように、16世紀社会における経済の発展と富の蓄積は、より文明的な、優雅で気品高い慣習や作法への広汎な欲求を生み、洗練された社交的社会の形成を促した。ルネサンスの才人たちがスコラ哲学を忌み嫌ったのも、単にその教育のあり方を疑わしく考えたからばかりではなく、それを高雅とも礼節とも無縁の「野蛮と粗野の訓練場」とみなした点によるところが大きい (p.236＝409頁)。彼らが掲げた教育理想も、すぐれて貴族主義的な性格を帯びることになった。教育の目的も、精神を豊富絢爛たる知識か、あるいは文芸の伝える魅惑的な優美さによって飾ることにおかれた (p.252＝438頁)。わけても、エラスムスを旗手とする人文主義的教育思潮には、そうした貴族的な趣向が顕著であった。ギリシア・ローマの古典が称揚され、模倣されたのも、それらが文芸に対する要求を満たすものであったがゆえである (p.237＝410－411頁)。

しかしながら、デュルケームによれば、人文主義の推奨していた審美的教養は、現実的精神を欠き、実生活に対処するすべを教えなかったのみならず、さらなる重大な問題点をはらんでいた。それは、「不道徳性、あるいは少なくとも低級な道徳性」(pp.239－240＝414－415頁) をもたらしかねないという点である。道徳が本質的に行為の領域に属し、現実＝客観的実在をその対象として志向するのに対し、審美的教養は非現実の世界に想像力をはばたかせることをこそ旨とする。美的印象を完全に感得するには現実から離脱することが必要となる。したがって、過度の審美的教養はわれわれの眼を現実から背けさせることによって、道徳的活動の原動力を弛緩せしめる危険があるといわざるをえない。事実、「この時代に道徳的感情の一般的な衰退がみられることは議論の余地がないところである」(p.243＝421頁)。それは典型的には、「義務」の観念の希薄さとなって現れている。人文主義者の行動の原動力は、命令する規則に対する私欲を離れた尊敬ではなく、名声に対するあこがれ、地上的名誉に対する愛着という、利己主義的な感情であった (pp.243－245＝422－425頁)。デュルケームのみるところ、豊富で全人的な学識の追求への自己忘却的な没入により特徴づけられるラブレーの理想は、人文主義よりはるかに高邁なものであった――次節でも多少触れる――とはいえ、やはり貴族主義的な特質を免れてはいなかった。それは人文主義同様に、現実に対峙せず、義務の感覚を欠き、人々を精神の装飾に向かわせるだけという重大な欠陥をはらんでいた (pp.249－252＝433－438頁)。さらにモンテーニュに至って、文芸はもちろん、学問も精神の外的表面に影響は与えても、知性や精神の根底を形成する力はもたないとする、一種の教育上の虚無主義へと行きついてゆく (pp.254－260＝442－452頁)。

ここでの「危機」は、沸騰の中で生成した当の理想が、道徳的弛緩を胚胎するところに現れる。ルネサンスの繁栄は、当時の社会が中世の陰鬱で不安定な状態から脱して、富と福祉の増進を背景とする相対的に安定した秩序を実現したところに可能になった。それは確かに、新たな理想を生み出すとともに、文明の創造に大きく寄与した。しかし、「あらゆる窮屈さや拘束から免れた、気楽な、自由な生活」(p.253＝440頁) への志向から生まれ、これを反映した新たな教育理想は、道徳性を涵養するどころかかえってこれを衰微させ、皮肉なことに社会の安定に対する危険因子となったわけである。

そもそも、デュルケームの基本的な認識にしたがえば、理想は社会の統合を強化するとともに、諸個人を狭隘な自己への関心から脱せしめ、集団への献身に向けて道徳的に昂揚させる役割を果たすはずである。それは、沸騰的・革新的変動という意味――主として本節冒頭で言及した意味――での「危機の時代」においても同様である。「人々の道徳的統一 (unité morale) をつくり出すのはなかんずくこの理想である」(1974a〔1906〕: p.89＝1943：154頁)「個人間に取り交わされる作用・反作用から１つのまったく新しい心的生活が遊離され、それはわれわれが孤立して生活していては思いもつかない世界にわれわれの意識を運んでゆく。われわれがそれをよく認識するのは、ある大きな集合的運動がわれわれを捉え、われわれを自分以上に高め、われわれの姿を変えるような、危機の時代においてである」(ibid.：p.79＝134頁。傍点引用者)。晩年のデュルケームが、革新期のもたらす道徳的再生にひたすら期待を高めていったのも、かかる認識に導かれてのことであった。そうした彼の姿を印象にとどめている者にとっては、デュルケーム当人の如上の議論は特異なものに映ずること

であろう。

「第2のルネサンス」ともいうべき時期と対比しても、その特異性は際立っている。すなわち、「第2のルネサンス」の説明においては、沸騰的な精神的昂揚とともに出現した「知識欲に燃えた人々」の群れが、それを満足させる特定の地点（とりわけパリ）をめざして熱狂的かつ大規模に集中したこと（pp.81－84＝147－152頁）、またその結果、大学という「凝集性と統一性をもつ」（p.104＝187頁）新たな、集合化された道徳的環境が生み出されたこと、等の指摘がみえる。ここでは、教育という部面に限定された指摘であるとはいえ、沸騰にはやはり道徳的統合をもたらす契機としての位置づけがなされている。

いずれにせよ、創造期・革新期の沸騰→理想の形成→社会の道徳的再生という、われわれにおなじみの図式は、少なくとも『教育の発展』における16世紀ルネサンス論には当てはまり難いというべきである。

それでは、デュルケームはルネサンスを、その本質において異常で病理的な時代として捉える見方に傾いていたにであろうか。それを次にみよう。

4．ルネサンスは「アノミーの時代」か？

近年、16世紀ルネサンスを道徳的・教育的危機と捉える視点には、同時代が直面する危機的状況に対するデュルケームの問題意識が反映されているとして、彼のルネサンス論と同時代の危機に関する議論との間にある種のパラレリズムを看て取る解釈に出会うことがある。メシュトロヴィッチの解釈がその代表的なものである。本節では、こうした見方が妥当であるか否かを検討することを通じて、デュルケームのルネサンス観にみえる複雑な陰影に迫りたい。

メシュトロヴィッチは、「デュルケームはルネサンスを忌み嫌った（abhorred）」と断定する（Meštrović, 1988：p.14）。彼の見るところ、ルネサンスは「極端なアノミーの時代」（Meštrović ,1991：p137）として描かれている。「ルネサンスはあらゆる規制と規律への恐怖により特徴づけられる時代であり、それはデュルケームが他の箇所でアノミーについて語った論法であった」（Meštrović ,1988：p.15）。それゆえ、デュルケームは現代（the present era）とルネサンスを、「アノミーが主要な役割を果たす2つの時代」とみなしていた（ibid.：p.71）。メシュトロヴィッチによれば、ルネサンスを説明するためのデュルケームの語彙は、アノミーを表す語彙そのものである[2)]。すなわち、ルネサンスこそは、「すべての制限への耐え難さ〔impatience with all limitations〕」、「分別ないし中庸〔discretion or moderation〕」の欠如、「惑溺〔infatuation〕」、また「飽くことを知らない渇望〔insatiable thirst〕」、そして「果てしない欲求〔infinite longings〕」等々が、「混乱〔disarray〕」と「道徳的感情の衰退〔enfeeblement of moral feeling〕」を帰結した時代であった[3)]。また、生活の文芸的・審美的側面の強調は、「不道徳性、少なくとも低級な道徳性」の萌芽をはらんでいた。この時代のモットーは「汝の欲するとおり行え」というものであり、デュルケームはこれを、「彼が軽蔑的にあしらった」ラブレーから引いている。デュルケームはラブレーを、「その時代の代弁者」とみなしていたため、彼の「無限なるもの」に対する「飽くことを知らない渇望」を容認できなかった。そしてこの無限なるものへの傾斜を問題視する見方は、デュルケームがそのすべての著作において同時代の多くの思想家に向けた非難と同一のものであった（ibid.：pp.15－16）。

メシュトロヴィッチは概ね上のように述べて、ルネサンスとデュルケームの同時代はアノミーの蔓延という共通の観点から捉えられていたと主張する。

確かに、メシュトロヴィッチの指摘するとおり、デュルケームのルネサンスに関する議論には、『自殺論』その他のアノミー論の文脈で解釈可能にみえる言説が多く含まれている。また、デュルケームが記述したルネサンスの時代相に注目しても、①旧秩序からの離脱に伴う規範の無力化　②経済界の繁栄と富の蓄積　③禁欲的価値から物質的充足を肯定する価値への転換　④階級間の接近と平準化の進展　⑤（アノミーが一種の個人

主義の病理であることを考慮すれば）個人における自我意識の成長　といった新たに出現した動向は、ある部分デュルケームがアノミー発生の社会的基盤と考えた要因と重なり合うところがある。デュルケームのアノミーに対するまなざしが、当時の「ベル・エポック」の一見華やかな繁栄の裏側で進行しつつあった病理を透視したのと同様に、ルネサンス論もまた、平安と繁栄の豊かさの背後に忍びよる精神的・道徳的腐食を鋭く指摘したものであることは紛れもない事実ではある。

しかしながら、ルネサンス論には、デュルケームの同時代の診断とは微妙にニュアンスの異なる認識が含まれていることに、注意を向ける必要があるだろう。その相違の大きな部分は、「時代の気分」への言及の仕方に現れている。

すでに述べたように、デュルケームによれば、ルネサンスは、「個人も社会もカロリング帝国の崩壊によって生じた混沌とした、変動の多い、不安定な状態に代わって、より安定した、より調和的な組織をもたらす」ための長年にわたる辛苦がようやく軌道に載り、「人々が足下がしっかりと固められたのを感じ、社会の諸機能も正しく調整され、物的生活もより楽に、より豊かになった」時代である（pp.252－253＝439頁）。ここで注目すべきは、そうした社会の状況を反映して、「過ぎ去った陰鬱な、苦労の多かった時代とは対照的」な、「肩の荷のおりた、歓喜に満ちた気分（une impression d'allégement et d'allégresse）」（p.253＝440頁）が、まさしく「時代の気分」となっていたことである。デュルケームは、『自殺論』において、「個人的な気分というものがあるように、集合的な気分（une humeur collective）もあって、それが国民を悲しみに沈ませたり、快活にしたり、また物事の見え方を楽観的にも悲観的にもする」（1976〔1897〕：p.229＝1985〔1968〕：255頁）と述べているが、ルネサンスに関し特徴的なのは、「快活」で「楽観的」な気分についての言及はあっても、「悲しみ」の気分を語った箇所は見られないことだといってよい。重苦しさや陰鬱さは、もっぱらルネサンスに先立つ、中世の時代的気分として語られているのである。これは、ルネサンスが一方では、一見不安な気分の支配を予想させる、「教育的・道徳的危機の時代」として説かれていたこと、さらにまた、『自殺論』その他における同時代の診断ではむしろ、「ベル・エポック」の華やかな気分よりも、その陰で深刻化する動揺と混乱のもたらす、グルーミーで不安な時代的気分が強調されていたことに引き比べて考えると、たいへん興味深い。

少し別の角度から検討しよう。『自殺論』では、自殺は、ほかならぬ「社会の気分（l'humeur des sociétés）」（ibid.：p.422＝470頁）のあり方を表現するものと考えられている。それは具体的には、「集合的な悲哀の潮流（courant de tristesse collective）」（ただし過度の）のかたちをとって現れる。悲哀の潮流は、集合的な病――道徳の貧困や崩壊――の合力であり、兆候でもある（e.g., ibid.：p.445＝497頁）。そして、この潮流が大きな力を獲得したとき、それは何らかの種類の悲観的な思想を生み出す。「事実、ローマやギリシアにおいてエピクロスやゼノンの、希望を挫く教説が出現したのは、社会が重大な病に襲われつつあると感じられたときにほかならなかった。したがって、その由々しい説が形成されたという事実は、社会組織の何らかの混乱によって、悲観的な潮流が異常な強度に達していたということの指標をなす。この悲観的な説がいまやいかに多様を極めているかは周知の通りである」（ibid.：p.424＝472頁）。同時代において、ショーペンハウアーやハルトマンなどの公然たる悲観主義哲学や、無政府主義者、神秘主義者、革命的社会主義者などの、現実を嫌悪してその破壊やそれからの逃避を願う思想の台頭がみられることは、「集合的憂鬱」が病的な程度まで達していることの証左であると、デュルケームはいう。

では、ルネサンス期の教育理想についてはどうか。デュルケームのみるところ、エラスムス・ラブレーの思想には、ある一面で伝統破壊をこととする方向性や現実離脱的傾向が存在する点、またモンテーニュの考え方には一種の虚無主義がみとめられることは上に述べたとおりである。だが、ルネサンス論において、それを社会の悲観的潮流の所産として扱った部分を見つけることは困難である。彼らは「悲観主義」の文脈では扱われていないのである。ここにもまた、時代的気分を捉えるにあたって、悲観的潮流がその視野の外に置かれていたことの１つの表れをみることができる。

こうした気分の相違は、デュルケームが基本的に同時代を、彼のいう「道徳的寒冷期（période de froid moral)」(1970〔1914〕: p.312＝1988：248頁)、つまり社会の衰退期として捉えていたのに対し、ルネサンスには何はさておき「革新期」としての位置づけが与えられていたことによるところが大きい[4]。

デュルケームが、ルネサンスの思想家たちの義務の観念の希薄さを辛辣に批判していることは事実である。しかしながら、ラブレーやエラスムスらが義務的拘束を嫌悪したのは、束縛や気苦労の多い中世の陰鬱な生活から離脱した、新たな時代がまさに幕を開けたという解放感の然らしめるところであった。「肩にのしかかった重苦しい空気は軽くなり、人々はより自由な息吹きを呼吸していた。また人々は抵抗力の少ない、人間の欲望を押さえつけることのない環境の中で活動しているようであった。こうして、何ものにも阻止されることなく、自由に放任しておくだけで十分な力強さ、自律性、独立性、気楽な活動の感覚が生まれてきたのである」(p.253＝439－440頁)。「あらゆる窮屈さや拘束から免れた、気楽な、自由な生活」(p.253＝440頁）が追求されたのは、そのためである。ことここに関する限り、束縛の不在は必ずしも否定的なニュアンスでのみ語られているとはいえない。むしろそれは、新鮮で進取的な時代の気分のなかでの、自由な人間性の発展というイメージに結びついている。これを同時代診断と比較してみよう。確かに、社会変動に伴う伝統的道徳規範の後退と無力化は、エゴイスムやアノミーを説明する際にも取り沙汰されていた。こうした道徳的病理はある一面では、旧来の規範の凋落によって新たに生成した「自由」や「平等」の逆機能的な帰結であるともみなしうる。その点に限っては、ルネサンスの「自由な息吹き」もまた、義務の観念の不在をもたらしたのは事実なのであるから、両者にはそれほど隔たるところはないかもしれない。だが、前者が「道徳的寒冷期」の危機的な社会変動の渦中で体験される、憂鬱と消沈、焦燥と幻滅といったネガティヴな精神状況に強調点があるのに対し、後者はむしろ、一陽来復の明るさの中での力強く伸びやかな気象の発展にこそ、目が注がれている感がある。たとえそれが、道徳的欠如の萌芽を内蔵していたとしても。

そうしたルネサンスの革新期としての特質は、ヨーロッパ史全般においてルネサンスが占める位置と関連している。デュルケームの考えるところでは、先にも言及したように、「16世紀になって、諸国民は最も溌剌とした青春期に入った」のであり（p.201＝348頁)、「ルネサンスとは、ヨーロッパの社会が全き青春期を迎えた時期」(p.218＝375頁）にほかならない。このような、ルネサンスを「青春」に類比して捉える見方が、議論のトーンをいっそう明るいものにしている。そもそも革新期を特徴づけるのはその生命力の豊かな蓄積であるが、青春期はことに「血気盛んな」時期である。諸国民は溢れんばかりの過剰な生命力をもてあまし、そのはけ口を求めていた（p.201＝348頁)。それは勢いの赴くところ、「無限を希求する」。「あらゆる制約や限界を無視するのが青春時代の特質である。青春は自らの中に、溢れ出ることしか求めない生の過剰を感じるがゆえに、その活動を展開するため、どれだけ自由の余地があっても多すぎるとは思わないだろう」(p.218＝375頁）[5]。

ここで取り上げるべきはラブレーであろう。彼はメシュトロヴィッチによって、あたかもアノミーの使徒であるかのように論じられた。だが、とわれわれは問うことができよう。ラブレーの思想の根底には、アノミーとパラレルな傾向が本当に存在するのか？ デュルケームによれば、「ラブレーの全著作を支配する思想は規制、訓練、行動の自由な発展に対する障害となるもの一切への、激しい嫌悪である。人間の欲望、要求、感情を阻止し抑制するすべては悪であった」(p.210＝361頁)。なかんずくラブレーの教育理想を特徴づけているのは、「無限に対する欲求（besoin d'illimité)」(p.218＝375頁)、すなわち、「人間がそこではその本性を自由に展開できる無限の空間に対する欲求である」(p.211＝362頁)。それは、知識や学問に対する「飽くことを知らない渇望」(p.213＝367頁）のかたちで現出している。メシュトロヴィッチはラブレーのこうした傾向に、まさしくアノミーそのものをみるのだが、デュルケームのテクストに即して考える限り、それはやや皮相な解釈であるように思われる。その最大の理由は、デュルケームがラブレーを批判していることは事実であるけれど、それは彼の理想の貴族主義的・奢侈的性格および義務の観念の欠如に重心がかけられており、不思議なことに、肝腎の無限に対する飽くことのない渇望そのものについては、「青春の大らかな幻想」(p.219＝376頁)、「節度

を越した」(p.234＝405頁) といった表現の、相対的に穏やかな批判しか見られない点にある。それどころか逆に、デュルケームはラブレーの無限への志向に、一種の道徳的要素すらもみとめているのである。「これ〔＝人文主義者の利己主義的感情〕に比して、ラブレーが心中深く感じ、生徒の中にそれを喚起させようとしていた知識に対する渇望はなんと高潔なものであろう。実現がめざされた全人的、絶対的学識は何人も到達できない高い理想であり、この理想は高く天翔けつつ、人々に自己の彼方、自己を超越したものへと眼を向けることを求めていたのである」(p.245＝425頁)。「〔万物をよりよく知ることにより〕人間は、無限に彼を超越し、彼の外にその中心をもつ巨大な体系の一部であることを漠と予感するのである」(p.246＝426頁)。この無限なるものに対する敬虔の念こそは、「われわれを取り巻き、包み、支配すると同時に、われわれがそこから生命を汲み取り、かつこれを養う源泉でもある、あの偉大な全体に対する従属感の別のかたちにほかならないのである」。デュルケームは、この従属感を「道徳的依存の感情」とさえ呼んでいる (p.247＝427－428頁) [6]。こうした見地を、アノミーに関する議論と対比するとき、両者の差異は印象的である。アノミー論では、無限への希求は、物質的なものはいわずもがな、たとえ高度に精神的な性質の活動におけるものであっても、それ自体病的であり、たえまない苦痛の源となるとされている (1974c〔1925〕: pp.33－34＝1964 : 72－73頁)。それは本来的に危険な傾向であり、悲哀の潮流と不可分である。「今日のごとく、無限という病に冒された時代は、必然的に悲哀の時代である・・・・ペシミズムは常に無限への希求を道連れとしているのである」(ibid. : p.35＝74頁。傍点引用者)。これに対し、ラブレーの無限への志向には、決して声高ではないにせよ、ある好意的な評価が加えられているといえる[7]。ラブレーの無限に対する欲求をめぐるデュルケームの議論は、少なくとも、青春の清新な活力の横溢した革新期としてのルネサンスという文脈を把握することを抜きにしては、正しい理解が可能とはならないに違いない。

念のために確認すれば、デュルケームは「あらゆる制約や限界の無視」を手放しで称揚したわけではない。「節度と中庸」の大切さに対する彼の信念が一擲されたとは思えない。ただ、ルネサンス論におけるデュルケームには、気宇壮大な夢想に駆られてはやり立つ、青春の熱気に節度を欠いた危うさを感じつつも、そこに青春の青春たるゆえんをみとめて諒としようとするにも似た態度が垣間見られるように感じられてならない。「時とともに人間は節度と中庸の必要を学びとるのである。人間がその本性の越えることのできない限界を発見し、それを尊重することを学ぶのは唯一経験によってである」(pp.218－219＝375－376頁)。

5．おわりに

以上のような、デュルケームのルネサンス観についての検討を通じて確認されるのは、やはりアンビヴァレントと呼ぶほかない態度である。デュルケームがルネサンスを、「教育的・道徳的な危機」とみとめて容赦ない批判を加えたことは事実である。しかしながら、これに一から十まで病理的な時代とのレッテルを貼って断罪したわけではなかった。ネガティヴな評価に傾きながらも、ルネサンスがフランスの歴史に屹立する「偉大な」変革期であり、ラブレー、エラスムスが「偉大な教育思潮」の唱道者であることには疑いを抱いていない。「革新」と「危うさ」とは、表裏一体のものとしてある。そこには、単純な定式には収まりきらない、微妙な考察が盛られているといえる。デュルケームの、事象の複雑さに対する感受性とも呼ぶべきものが息づいている、ということができるかもしれない[8]。 だが、デュルケームは、晩年になるほど「道徳的寒冷期」を突破する創造的沸騰、そして新理想の出現に期待感を募らせてゆく。それとは逆に、両義性の認識は後景に退いていったようにもみえる。集合的沸騰の生み出す理想の性質に関する問題に対して、「デュルケームは過度に楽観的であった」(Hawkins, 1995 : p.39) との評価が下されるのも、これと無関係ではないだろう。『教育の発展』や『宗教生活の原初形態』等の著作に表明された後期デュルケームの変動観は、従来個々のテクストの異同を考慮に入れずに、ひとまとめに論じられてきた憾みがあった。変動観の内実をより分節化して考察する必

要がありそうである。

《註》

1) また、1．はじめに で引いた一文にもみられるように、デュルケームは後年、ルネサンスを「沸騰期 (les moments d'effervescence)」の1つに数えている (1974b〔1911〕: p.115=1943: 206頁)。

2) メシュトロヴィッチは、アノミーの唯一の明示的な同義語は "dérèglement" であるゆえ、アノミーは後者の含意する不道徳性 (immorality) や苦痛 (suffering) といった意味を帯びているという。それは宗教的・道徳的なニュアンスを伴い、悪 (evil) ないしは罪 (sin) の観念を表現するとされている (Meštrović, 1988: pp.62−63)。

3) それぞれの語句の原語を示すと—— "impatience with all limitations": "une impatience de tout frein, de tout borne, de tout ce qui arrête" / "discretion or moderation": "la mesure et la modération" / "infatuation": "ivresse" / "insatiable thirst": "la soif insatiable" / "infinite longings": "besoin d'illimité" / "disarray": "désarroi" / "enfeeblement of moral feeling": "un fléchissement du sentiment moral"。

4) 「道徳的寒冷期」・「革新期」といったデュルケームの社会変動における時期区分については、(横井, 2000) を参照されたい。

5) 『自殺論』には、次のような記述がある。「年老いて進むべき方向を見失った国民においては、生の嫌悪や無気力な憂鬱が、それの含意する忌まわしい結末とともに、容易にそこに芽ぐむことになろうが、逆に、若々しい社会にあっては、ことに発達をみるのは燃えるような理想主義や高邁な宣伝への情熱や積極的な献身である。・・・・国家が創られてゆくのは彼らによってであり、偉大な改革者が参集するのもすべて彼らの内からである」(1976〔1897〕: pp.45−46=1985〔1968〕: 64頁)

6) ジョーンズは、「誇張されるべきではない」と留保を付しながらも、デュルケームがラブレーに抱いていた敬意を指摘し、ラブレーの説にみられる道徳的要素にも言及している。メシュトロヴィッチに比較すれば、ジョーンズのラブレーに対する見方ははるかに平衡がとれている。(Jones, 1999: pp.61−62)、参照。

7) Ph.ベナールは、デュルケームのラブレー論には無限への志向に対する評価の著しい転換がみられるとして、以下のように述べている。「デュルケームは、ラブレーの教説を特徴づけるために、少し以前までアノミーを定義し、その病的な性質を告発するために用いていた用語 "『限度を知らない欲求』・『無限への希求』" を再度取りあげている。彼がラブレーのうちに見いだした、人間の本性と社会における個人の正常ないし望ましい状態についての考え方は、まさしく彼がついこの間まで強力に異議を唱えていた当のものである」(Besnard, 1993: p.128)。ベナールはデュルケームのラブレー論を、デュルケームがその研究歴の半ばでアノミーの概念を放棄したとする彼の主張を裏書きする1つの証拠として位置づけている。「〔デュルケームは〕社会問題としてのアノミーを完全に放棄した」「欲求の膨張と無限性は、もはや深刻な脅威という汚名を着せられることはない」(ibid.: p.128, 129)。ベナールの主張に賛同するか否かは別として、無限への志向にポジティヴな評価がなされていることについては、異論のないところである。

8) この文脈でわれわれの注意を惹くのは、集合的沸騰としてのフランス革命の認識に関しても、デュルケームにはやはり両価的な態度が垣間みられることである。この点については、つとにリン・ハントによって指摘されている。「デュルケームは、大革命にアンビヴァレンスを感じていた。『1789年の諸原理』は、『大衆を大いに動かし』、『偉大な諸事象を生み出した』。しかし、それはまた、『病理的な側面』をも有しているように思われたのである」(Hunt, 1988: p.39)。

《文献》

☆文中の引用部分は、デュルケーム本人の場合、(出典〔その初版・初出〕: ページ数=邦訳の出典〔その初版・初出〕: ページ数) という形で表記し、下記の一覧に対応させた (ただし、*L'évolution pédagogique en France* については、引用が頻繁となるため、(ページ数=邦訳の頁数) と略記)。デュルケーム以外の場合も基本的に上記に準ずる。なお、引用文は必ずしも邦訳と一致しない。

Besnard, P., 1993, "De la datation des cours pédagogiques de Durkheim à la recherche du thème dominant de son oeuvre", dans F.Cardi et J.Plantier(eds.) *Durkheim, sociologue de l'éducation*, L'Harmattan.

Durkheim, É., 1969〔1938〕, *L'évolution pédagogique en France* (2e éd.), P.U.F. (小関 藤一郎訳『フランス教育思想史』行路社, 1981〔1966〕).

――――, 1970〔1914〕, "L'avenir de la religion", dans *La science sociale et l'action*, P.U.F. (「宗教の未来」, 佐々木 交賢・中嶋 明勲訳『社会科学と行動』恒星社厚生閣, 1988, 所収).

――――, 1974a〔1906〕, "Détermination du fait moral", dans *Sociologie et philosophie* (4e éd.〔1re éd.1924〕), P.U.F. (「道徳事実の決定」, 山田 吉彦訳『社会学と哲学』創元社, 1943, 所収).

――――, 1974b〔1911〕, "Jugements de valuer et jugements de réalité", dans *Sociologie et philosophie* (4e éd.〔1re éd.1924〕), P.U.F.)「価値判断と現実判断」, 山田 吉彦訳『社会学と哲学』創元社, 1943, 所収).

――――, 1974c〔1925〕, *L'éducation morale* (nouv. éd.), (麻生 誠・山村 健訳『道徳教育論』1 明治図書, 1964).

――――, 1976〔1897〕, *Le suicide* (nouv. éd.), P.U.F. (宮島 喬訳『自殺論』中公文庫, 1985〔1968〕).

Hawkins, M., 1995, "Durkheim and Republican Citizenship", in K.Thompson (ed.) *Durkheim, Europe and Democracy*, Occasional Papers No. 3, British Centre for Durkheimian Studies.

Hunt, L., 1988, "The Sacred and French Revolution", in J.C.Alexander (ed.) *Durkheimian Sociology : Cultural Studies*, Cambridge University Press.

Jones, R.A., 1999, *The Development of Durkheim's Social Realism*, Cambridge University Press.

Meštrović, S.G., 1988, *Emile Durkheim and the Reformation of Sociology*, Rowman & Littlefield.

――――――, 1991, *The Coming Fin de siècle : An Application of Durkheim's Sociology to Modernity and Postmodernity*, Routledge.

横井 敏秀, 2000,「デュルケームにおける循環的変動観の形成」『日仏社会学会年報』10号。